教師と生徒が時にぶつかり合い未来をつくる場所――それが「高校」

山梨県立吉田高校 髙保裕樹（たかほゆうき）

学校教育目標が教師、生徒、保護者の共通言語になった

私たちが育てたいのは、人生を通して学び続ける人です。「学びは授業中だけ」と考えるのではなく、日常生活のすべてが学びだという意識を生徒に育みたかった私は、校長として赴任してすぐ、高校3年間を通じて身につけてほしい力を、学校教育目標「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP＊）」として明文化し、授業はもちろん、学校行事や部活動など、すべての教育活動における共通の目標としました。

吉高GPを掲げて3年目になりますが、学校教育目標は生徒にとって身近な存在になっています。昨年には、「後輩に、吉高GPの大切さを理解してもらいたい」と考えた3年生の有志生徒が、実社会で直面するかもしれない様々な問題を、吉高GPを使ってどのように解決するかを考え、話し合うワークショップを実施しました。また、保護者から「社会や仕事で必要とされる力について、吉高GPと結びつけながら子どもと話をするようになった」といった声を耳にすることもよくあります。教師、生徒、保護者にとって、吉高GPは達成すること以上に、今後必要になる資質・能力を語り合うためのきっかけとして価値を持っているのです。

吉高GPは、生徒のものであるからこそ、生徒は吉高GPを自分たちの未来によりフィットした目標へと自らの力で変えようとします。生徒会役員選挙では「吉高GPの改善」を公約に掲げる生徒がいますし、先日も生徒集会で、1年生が、「吉高GPの『傾聴力』は、『解釈力』に変えた方がよいと思う」と提案しました。すると生徒たちは、「その方が、より今の時代に合っているのでは」「みんなが納得できる言葉になっているか」と私たち教師の目の前で話し合い、最終的に「現状のままがよい」という結論にたどり着きました。議論を満喫した様子の生徒たちを見て、私は、生徒が自分の力で学校をよりよく変えようとしていることに、大きな感動を覚えました。

「絶対解」が存在しない課題が山積する時代になった今、これからの学校は、教師が教える場から、教師と生徒がともに学び、成長する場になるでしょう。生徒は、教師の言葉に疑問を感じた時は、それをきちんと教師に伝え、教師は、ともに学ぶ者として生徒の言葉に耳を傾けた上で、自分の考えを説明する。生徒と知的な議論をすることで、教師は生徒にとって、「あの人のようになりたい」と、変化の激しい時代におけるロールモデルになるのです。

そして教師は、生徒にとって対話を通じて、未来をつくる仲間であればよいのです。完璧な存在ではなく、1人の人間として生徒の前に立ち、過去の成功体験や常識にとらわれずに、生徒の言葉に耳を傾け、よさや可能性を引き出していく。それができれば、不足や苦手を抱えていても、必ず生徒は教師を尊敬します。同じことは、教師同士でも言えます。特に、これからの管理職には、うまくいかなかったことを語れるかが重要

◎教職歴35年。同校に赴任して3年目。学校長。初任で吉田高校勤務後、教育庁社会教育課などを経て、現職。生徒の自己肯定感を高める多面的な教育目標として「吉高GP」を設定。教育活動全般の改善を進め、「学校教育デザイン」推進のモデルとして、全国から注目を集めた。

＊「自己肯定力」「傾聴力」などの8つの資質・能力。本誌2017年6月号P.10～13参照。

教師が語る「高保校長から得たもの」

教務主任　東（あずま） 一孝（かずたか）

教育には不易と流行があります。生徒に向き合う教育者としてのあり方は変わらなくても、変化する社会の中で学校の果たすべき機能や役割を見直し、常にバージョンアップをしていく感度と覚悟が、私たち教師には求められているように思います。本校は、高保校長が掲げた「吉高ＧＰ」の下、学校行事の精選や授業の改善を絶え間なく続けていますが、「吉高ＧＰ」という軸を得たことで、教師一人ひとりが、時代の動きを踏まえたこれからの教育を考えることができるようになったのです。

1学年主任　在原綱樹（つなき）

高保校長は、壁にぶつかった経験も含めて、自分の生き様を赤裸々に我々教師に対して、そして時には生徒に対しても語ります。それは、「こうすればうまくいく」という人生の模範解答ではなく、生き方を一緒に考えようという問いかけのように感じます。そこに集う人たちがそれぞれのよさを引き出し、認め合いながら、集団の力にしていく……教師にとっても生徒にとっても、学校はそんな場であるべきだと、高保校長との３年間は私に教えてくれたように思います。

１学年担任　川崎はるな

高保校長はアイデア豊かで、発想力に富んだ先生です。しかし、私たちに自分の考えを押しつけることはせず、「こういう考えもあるんだよね」と、私たちが自分の力で気づきを得るような言葉を与え、それぞれの成長を促します。高いアンテナを持って様々な情報を収集し、そこから確固たるご自身の考えをつくりながらも、私たち若手にも職員室で気さくに話しかけ、若手の考えを丁寧に聞いていく高保校長から、これからのリーダー、これからの教師として必要なあり方を学んだように思います。

になるように思います。絶対解が存在しない時代だからこそ、うまくいかなかった経験の中にも学びがあったことを、先生方に、そして生徒にも話してあげてほしいのです。

「こうしなさい」と指示するのではなく、「私はこう思うのだけれど、あなたはどう思う？」「一緒に挑戦してみない？」と問いかけてもらった方が、生徒も教師も成長するはずです。納得できなければ、話し合えばよいのです。それは、私たちが未来を生きる生徒に必要な力として求めていることなのですから。高校は、生徒と教師にとって、時に知的にぶつかり合いながら、未来をつくる場所であってほしいと願っています。

山梨県立吉田高校

◎校訓は「百折不撓」「純剛」。新入生を対象にした校歌・応援歌指導、富士登山強歩大会などの伝統行事を持つ。1、2年次の「総合的な探究の時間」の中に「富士山学」を設置し、富士山の観光、防災、産業、自然など、多角的な視点からの探究学習に取り組む。
◎設立　1937（昭和12）年
◎形態　全日制／普通科・理数科／共学
◎生徒数　1学年約260人
◎2019年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、東北大、筑波大、東京大、名古屋大、大阪大などに99人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ513人が合格。
◎URL　http://www.yoshidah.kai.ed.jp